

1990-23

発行：麟パロル社

製作：南原企画

二〇世紀最大のイベント屋

この記事を「週刊宝石」というちょっとエッチな雑誌に書いたのは、ゴルバチョフが大統領になった三月中旬だった。当時、ゴルビーブームの真っ最中で、日本のマスコミはいたく彼に好意的であった。ほとんどソ連の救世主、殉教者といった扱いであった。が、そんなわけはないだろう、というのが僕の感じであった。そんなお方がソ連の書記長になれるわけはなかんべ、と考

えたのである。
で、要約すれば僕は彼をこう規定した。「極めて聡明、魅力的。政策能力は大したことはなさそうだが、弁術、権力操作は天才的。状況に対する適応力はまさにサーフアーのごとし。チェルノブイリ、つまり放射能によって弾けたという、二〇世紀的政

治家。要するに彼は時代によって舞台上に押し上げられた役者であり、善人か悪人かなど何の関係もない」と。

さて、それから四カ月、荒れに荒れた第二十八回党大会が終り、いまやゴルバチョフの評判はケチモンケチモンである。「ペレストロイカは完全に破綻。経済その他、失策の連続でありながら、天才的政略でその基盤を一段と強化。いまや独裁者の趣きである」云々。が、僕に言わせれば、何一つ交わってはおらず、それはマスコミの勝手な思い込みである。前文でも述べたように、現在のソ連に戦略など何の役にも立たない。だからこそ時代はゴルバチョフのよ



うな役者が必要としたのであり、彼は断じて実務家ではないからである。むしろ二〇世紀最大のイベント屋と考えたほうが正しいかもしれない。彼の役割は火つけ屋であり、後始末屋ではないからである。

世紀末大イベント巡り

ゴルバチョフ革命の足跡をたどる

強烈な歴史の皮肉

実はこのゴルバチョフの記事を書いてから、中国、ヨーロッパを回ってきたが、その旅はある意味でゴルバチョフの大イベント巡りでもあった。昨年五月十五日、ゴルバチョフは北京に到着。趙紫陽はかれに「すべては鄧小平が決める」と発言、最後の賭けに出た。また、学生たちは世界のスーパースターにアピールすべく、天安門から引かなかった。中国を訪れた要人は、天安門広場の人民英雄記念碑に献花することがならわしになっていったが、学生たちの占拠のために中止。面子を何よりも重んじるこの国で、それがどれほど鄧小平の怒りに火をつけたかは御存じのとおりである。歴史にifはないが、学生たちが引き始めていたこの時期、もしゴルバチョフの訪中さえなければ、あの悲劇は起こらなかったかもしれない。そして、中国は孤立した。

ないだろう。天安門事件の二か月後、東独市民が西独へ大量脱出し始めるが、こんなことがソ連の了解なくして可能だなどと考えるお人好しはいまい。そして、十一月九日、ベルリンの壁消滅。さらに、チャウシン・エスク処刑。このとき、ルーマニアの国境には事あれば、とソ連の戦車が押し寄せていた。中国とは対照的に、自由と民主を旗印にしたその演出は見事というしかない。ここに「欧州共通の家」構想を掲げ、ドイツ統一では主導権を握り、西独から五十億マルクの援助を引き出すなど、どこぞの広告代理店真っ青である。彼はいわば、自滅するしかなかった共産主義の崩壊を、イベント化するにより商品化する、という離れ業をやったのけたのである。これほどの役者に実務を求めるのは酷というものであろう。

が、強烈な皮肉だが、天安門で血が流されたからこそ、東欧はかくも見事な無血革命が可能だったのである。世界中の非難が中国に集中するなか、それはまさに格好の時であり、舞台であった。これを演出したのがゴルバチョフであることは言うまでも

ともあれ、彼が、二〇世紀最大の政治家であることに間違いない。やがてソ連の矛盾が限界に達したとき、彼は政治の舞台から姿を消し、もっと寡黙な実務家が彼の後始末をコツコツと始めることであろう。その頃、彼が風光明媚な故郷、プリポリノエ村で静かな老後を送っているかどうかは定かでない。
(みやたさとし フリージャーナリスト)

よくわかるペレストロイカ

橋爪大三郎

社会主義ソ連を大改造しようというのが、ペレストロイカ。それは市場を、ソ連経済に組みこまなければならぬ。ところがこれは、極めつけの難事業。一体なぜなのか、ペレストロイカの舞台裏をしっかりとぞいてみよう。

§1 ペレストロイカは何を狙う

ゴルバチョフのペレストロイカは、以下の三つの目標を表現しようとしている。

第一に、ブレジネフ・ドクトリンの精算。ブレジネフ書記長は、東ヨーロッパを、ソ連の完全な勢力範囲と考えた。独立国家ではあっても、勝手な振る舞いは許さない。経済の自由化や、民主化を試みたりすれば、国境を越えて戦車が乗り込んできた。東ヨーロッパは、ソ連の家来みたいなもの。この考え方を、ブレジネフ・ドクトリンという。

ゴルバチョフは、東ヨーロッパ諸国に、自由を認めた。東ヨーロッパの解放を、ソ連のペレストロイカの、序曲とするためである。

第二に、社会主義計画経済の放棄。

ソ連経済は今、絶体絶命のピンチにある。工場はノルマでがんじがらめ。食料品・生活必需品は配給で行列。どん底の生活に、国民はほとほと嫌気がさしている。これを立て直すには、誰が考えても、市場経済の導入しかない。

市場経済といえば、レーニン、スターリンの時代から、資本主義と同義だった。だから、市場経済に移行することは、共産主義路線の放棄に等しい。でもゴルバチョフは、それをやるかと覚悟を決めている。

第三に、マルクス・レーニン主義の旗を下ろすこと。

これまでソ連といえば、がちがちのイデオロギー国家だった。現実と思想が一致しない場合、あくまでも思想が正しく現実が間違っていると考えるのが、イデオロギーである。マルクス・レーニン主義は、世界で最も進んだ思想、絶対の真理ということになっていた。けれどもソ連の現実、一向に改善されない。しかも、マルクス・レーニン主義のイデオロギーを振りまわせば振り

まわすほど、事態はひどくなる。そこで、これはさすがに、マルクス・レーニン主義の方が間違っているのではないか、と考えるようになったわけだ。

これは、共産党の一党独裁を、放棄することを意味する。共産党は、マルクス・レーニン主義の総本山、キリスト教にたとえて言えば、ローマの法王庁のようなもの。何が正しく、何が間違っているか、みんな共産党が決めていた。軍隊も、国家も、共産党の指導にあった。これをやめて、複数政党制を導入する。民主主義の政治に移行するわけである。

そのためには、グラスノスチ(情報公開)も必要だ。スターリン時代の粛清の暗い過去、ブレジネフ時代の党の過ちを明らかにする。共産党に都合の悪かった事実を、人びとに知らせ、誰でも自由に自分の意見を発表できるようにする。

こういう二つの目標を実現しようと、日夜悪戦苦闘しているのがゴルバチョフ大統領だ。

ではなぜ、ペレストロイカが必要になったのか? ソ連の社会主義は、どこがどうだめだったのか? 社会主義/資本主義という体制の違いにさかのぼって、この問題を理解してみよう。

§2 マルクス主義とは何だったか

ソ連の社会主義体制を理解するには、まずマルクス主義から理解しなければならぬ。

マルクス主義は、マルクスの思想に基づいた共産主義の思想・運動をいう。ソ連という国家も、この運動によって生まれた。

さて、マルクス主義には、二本の重要な柱がある。ひとつは、**疎外論**、もうひとつは、**経済学**である。

人間が、人間本来のあり方から離れて、間違ったあり方になってしまうことを、疎外という。マルクスは、哲学者のヘーゲルから、疎外の考え方を受け継いだ。

マルクスの歴史観によると、人類はもともと、自然と調和した、対立のない社会を生きていた(原始共産主義)。ところが、労働の成果を特定の誰かが手に入れてしまい、私有財産が生じる。この私有財産をめぐって、持つ者と持たざる者の階級対立が生じ、それを軸に、古代の奴隷制→中世の封建制→近代の資本主義と、歴史が展開していく。世界史は、深まっていく疎外の歴史、階級闘争の歴史であり、それは、共産主義社会の実現する日まで続くことされた。ゆえに人間は、自分の本来のあり方を取り戻すため、疎外を克服するために、共産主義の運動に身を投じ、資本主義と戦わなければならない。これがマルクスの思想だった。

このような歴史観に基づいて、資本主義社会を批判しようとして、マルクスは一所懸命に経済学を勉強した。

彼が勉強したのは、当時最も先進的と言われた、リカルドの経済学だった。マルクスの『資本論』は、リカルドの経済学をふくらませたものである。

物(商品)を生産するのに必要な生産要素には、①土地、②労働、③資本、の三つがある。土地は、空気や水や地中に埋もれている鉄鉱石のように、人間が作り出せないもの。資本は、工場やスパナや機械など、人間が作ることでできるもの。労働は、人間がものを作り出すはたらきのこと。

一九世紀のドイツに生まれたマルクスは、資本主義社会を詳しく研究し、独自の思想を編み出した。彼の分析によると、資本主義社会は、自分の抱える矛盾によって間もなく崩壊する。そして、社会主義社会、最終的には、共産主義社会に到達するはずであった。

似たような言葉が多いので、整理をしておく、まず**社会主義**とは、金持ちと貧乏人、強者と弱者など、社会のなかの不公平を、国家や社会の力で正そうとする考え方のこと。社会主義には、民主的な手続きを重視する社会民主主義と、そうでない、マルクス主義のような社会主義とがある。

次に、**共産主義**とは、私有財産をなくしてしまおうとする考え方のこと。私有財産がなければ、金持ちと貧乏人もいなくなる。(だから共産主義は、一種の社会主義である。)共産主義は、財産をはじめ、人間の一切の差別がなくなった理想社会(コミュニオン)を、人類の究極の理想にする。

マルクス主義は、最も体系的な共産主義思想だ。マルクスは、資本家から生産手段(工場や土地など)を取り上げるべきだ、と考えた。もちろん資本家は、賛成するわけがないので、革命で無理やり取り上げる。そのために、共産党が労働者(プロレタリア)を組織して革命を起こそう。そういう暴力革命のプランを思い描いた。

革命が成功したあとも、資本家が反革命を企むといけないので、プロレタリアの独裁をしく。共産党以外の政党は、禁止。ロシアで革命を成功させたレーニンは、マルクス主義を徹底させて、ソ連国家のイデオロギーとした。これを、マルクス・レーニン主義という。

リカルドはこの三つの生産要素のうち、労働が本質的であると見た。物の値段(商品の価格)は、それを生産するのに要した労働の量によって決まる、と考えた。これを、労働価値説という。

現実の経済は、労働価値説の通りでない。地代(土地の価格)や利子(資本の価格)も存在する。そこでリカルドは、地代や利子が生ずる理由についても考えた。

マルクスは、リカルドの分析を受け継いだ。もう一歩踏み込んで、地代や利子が存在するのは間違いない、と考えた。価値があるのは労働だけなのに、土地や資本の持主が、働かないで利益を手に入れるのはおかしい。だから、土地や資本のような生産要素を、地主や資本家から取り上げなければならない、と主張した。

このように、マルクスの経済学は、リカルド以上にすみずみまで労働価値説でできている。そしてマルクスは、資本家が利潤を上げることができるのはなぜかを研究した。

物を安く買って高く売れば、とにかく利潤が上がる。しかしそれには、価格差がなければならない。価格差(不等価交換)がなくなれば、利潤は上がらない。

こういうタイプの利潤のあげ方を、マルクスは商業資本とよんだ。商業が活発なのは価格差の大きい、遠隔地交易などである。ところが近代の産業資本主義は、価格差のない国内市場で、ますます巨大になり、発展していく。それはなぜだろうか。

等価交換でありながら、しかも、利潤が上がる。この謎を、マルクスは次のように解いた。

その秘密は、労働力という、特殊な商品にある。資本家が労働者に支払う労働力の価値は、労働力の再生産費(労働者がかつ

かつて生きていくことのできる額)に等しい。ところが、労働力は、その価値以上の価値を生み出す。労働力が産み出す商品の価値は労働力の価値(賃金)より大きいのに、それがまるまる資本家のものとなってしまふのだ(搾取)。このように、労働力という特殊な商品を使用することによって、資本家が利潤を上げていることを、マルクスは『資本論』で明らかにした。労働者は働けば働くほど相対的に貧しくなり、資本家は働かないのに、ますます富んでいく。

*

『資本論』は、結局、つぎのことを証明した。労働が、そして労働のみが価値の源泉であると前提するならば、搾取が存在することが、全ての企業が利潤を上げること(＝資本主義社会が存続すること)の、必要十分条件である!

とすれば、労働者を搾取から解放するには、資本主義社会を打倒する以外にない。

ソ連共産党の政権は、マルクスのこの結論を、額面通りに主張した。労働以外の生産要素(土地、資本)に対する支払い(地代、利子)は、あってはならない。労働市場も認めない。それどころか、商品市場も認めない。市場を認めると、利潤を求めて資本主義が復活するからである。

ゆえに、ソ連共産党の政策は、社会主義計画経済とならざるをえない。市場を認めないのだから、労働は、国家の手で配分する。生産量は、国家の手でノルマとして指示する。消費物資は、配給する。資本や資源の配分も、国家の手で行なう。市場の存在そのものが悪、と考えられた。

材を使うべきか。市場があるならば、より高い価格でこの鋼材を買うことができる産業に、この鋼材が渡るに決まっている。高い価格で買えるのは、それだけ生産性が高く、利益が上がっている証拠である。そういう産業に限られた資源を使う方が、経済全体にとって有益である。もしも市場がなければ、この鋼材は生産性の低い産業に回されて、無駄になってしまうかも知れない。

*

市場経済では、誰もが自分の利益を、そして自分の利益だけを考へて行動する。それでもこの経済は、破綻するどころか、全体として最もよい状態を自動的に実現していく。このような性質を、かつてアダム・スミスは、「神の見えざる手」と呼んだ。

近代経済学者たちが、ここ百年ばかりの間証明しようとしてきたのは、このアダム・スミスの予言が正しいことである。彼らの努力の結果、この証明はおおむね完成した。市場経済は、それ以外のどんな経済にもまして、限られた資源を合理的に配分し、より高い満足をもたらしつつある。これは、ソ連型の計画経済よりも、アメリカの自由主義経済の方がすぐれている、という証明にもなっている。

§4 ソ連経済はなぜ落ちこぼれたか

一九三〇年代から四〇年代にかけて、ソ連経済は、日の出の勢いで成長しつつあった。スターリン政権のもと、相次ぐ五ヶ年計画が成功し、ソ連は超大国として地球の半分を君臨した。スターリンの後を継いだフルシチョフは、間もなくアメリカに追いつき追い越すと豪語したほどである。



第八次五カ年計画時の1970年、キルギス共和国の工場を視察するブレジネフ書記長

§3 自由主義経済と社会主義経済は、どう違う

このような社会主義計画経済は、資本主義経済の裏返しだと考へるとわかりやすい。

近代経済学は、資本主義経済をうまくモデルにしている。典型的なのは、ワルラスという学者が『純粹経済学要論』で述べたモデルで、ヒックスやサミュエルソンなど、のちの主だった近代経済学者はみなこれを使っている。

ワルラスは、資本主義社会が、次のような市場を擁するとした。

- (1) 商品市場
- (2) 労働市場
- (3) 土地の市場
- (4) 資本(生産財)市場
- (5) 貨幣市場

さて、近代経済学が主張するのは、こうした市場を含む資本主義経済が、極めて合理的なシステムであることだ。

この経済では、土地、資本、貨幣、労働が交換される。どれも稀少な生産要素だ。たとえば土地は、人間の手で生産できず、しかも生産に欠かせない。資本(生産財)は、過去の労働が形を変えたものであり、現在の労働に劣らず貴重である。貨幣は、総量が有限な交換の手段であって、商品、土地、資本を入手するのに必要だ。これらが、各企業の間で合理的に配分されるために、市場がどうしても必要なのである。

たとえば、10トンの鋼材があったとしよう。A産業もB産業も、この鋼材を必要としている。それでは、どちらの産業が、この鋼

そのころから見ると、最近のソ連経済の凋落ぶりは目を覆うばかりである。その理由として、二つを考へることができよう。

まずソ連経済は、市場の合理性を織りこむことができなかった。市場は、いま述べたように、すぐれた経済の自動調整メカニズムである。価格を手掛かりにして、各人が勝手に行動しているだけで、経済全体にわたって最適の状態が達成できる（パレート最適）。市場が存在しなければ、これと同じことをするのに、大勢の役人が中央計画局にカンヅメになり、何ヶ月もかかって計算しても追いつかない。

*

次に、貿易の利益からも、ソ連経済は完全に取り残された。

貿易の利益 (gains from trade) とは、二つ以上の国(経済)が、貿易を通じ、貿易をしなかった場合よりも有利な経済状態になることをいう。一九五〇年代から六〇年代にかけて、世界のエネルギー資源は、石炭から石油に大きくシフトした。日本の場合、中東から安い原油を大量に輸入するようになった結果、急速な高度成長をとげることができた。鉄鉱石、木材、穀物などの資源を世界中から輸入し、製品をアメリカに輸出するなど、日本が受けた貿易の利益は計り知れない。

ソ連など社会主義圏の国々は、自由主義圏と自由に貿易できなかったばかりか、社会主義圏相互間でも、ごく限られた取引しか行わなかった。この結果、ソ連の産業は合理化に立ち遅れ、国際価格よりずっと高い、粗悪な品質の製品しか作れない状態になっている。

*

さらに、資本や技術の移転がストップしたのも痛かった。

も根本的なのは、市場経済をうまく機能させるのに必要な行動様式を、ソ連の人びとが身につけていないからだ。そのため、やみくもにペレストロイカを実行しようとする、経済はますます混乱してしまふ。

*

市場経済と計画経済は、ちょうど正反対である、とのべた。計画経済は、生産数量から販売価格にいたるまで、なんでも中央で決定する、きわめて集権的な経済だ。それに対して、市場経済は、分権的な経済。星の数ほどある企業が、めいめい自分の責任で、どんな製品をどれだけ生産し、いくらで販売するか、決定する。そのため、どれだけ原料を仕入れ、どれだけ資金を借入れ、労働者を何人雇うかも決定する。

この決定には、責任がともなう。採算がとれなければ、そのうち企業は倒産しなければならない。採算のとれない企業は、社会的に必要とされていないわけだから、解体される。労働者は解雇されて、別の企業に雇われる、企業が使用していた土地や設備は競売に付されて、別の企業に買い取られてしまふ。こうして、より生産性の高い企業だけが生き残っていく。資源(土地、労働、資本などの生産要素)は、労働市場や資本市場を通じて、つねに最適に(再)配分され続ける。効率的な経済のためには、このような、ドライな割り切った一面が欠かせないのである。

その昔、マルクス経済学が全盛だったころには、集権的な計画経済の優位が誇らしく語られていた。計画経済には、景気変動(恐慌)も、失業も、倒産など資源の無駄もない、と。今日こういう主張を信じる者は、ほとんどいなくなった。かわりに市場経済の優位が、誇らかに語られるようになった。

七〇年代から八〇年代にかけては、コンピュータなどハイテク技術が爆発的に普及した時期である。石油ショックのあと、日本はうまくこの波に乗り、省エネルギー型で効率のよい経済に脱皮した。

ソ連経済は、この波に完全に乗りこねた。日本やアメリカがハイテク化にひた走る間に、依然として重厚長大の旧式技術から抜け出せなかった。高度技術が、コムの統制にひっかかり、入ってこなかったことも致命傷になった。

しかもソ連には、消費財の市場なるものが事実上存在しない。企業が消費者のニーズに合わせて技術革新を推し進める動機はないに等しい。なにしろ消費者は、おとなしく行列しているだけなんだから。こんな具合で、ソ連経済の地力はすっかり落ちてしまった。

ソ連経済を、このどん底の状態から救い出すのが、ペレストロイカの目的である。そのためには、なんとしても国内に各種の市場を作り出すこと、これ以外にない。社会主義計画経済を、ワルラスが描いたような、資本主義経済に改造するのだ。

§5 ペレストロイカは、どうしてうまくいかないのか

ソ連は発展途上国ではなくて、世界有数の産業国家である。教育もいきとどいているし、科学技術の下地もある。でも、ペレストロイカはとてつもなく困難だ。

なぜだろうか？ リガチョフのような保守派が反対しているから。それもある。旧式な設備を更新したり、頭の固い労働者を再教育したりするのが大変だから。それもある。けれども、もっと

*

ソ連はしばらく前から、企業の独立採算制を取り入れている。これまでは中央の指示に従うだけだった各工場が、独立し、一個の企業となって、自分で商売をすることになった。いや、自分で商売をしなければならなくなった、と言ったほうが正しい。JRの分割民営化みたいな感じである。業績が順調で利潤があれば、企業の自己資金として留保してもいいし、従業員の報酬として分配してもいい。そのかわり、利潤があがらなければ、整理・解体が待ち受けている。現場に権限と責任を移し、独立採算制を導入しさえすれば、経済は活発になって、あっと言う間に立ち直る——はずであった。

ところが、そうは問屋がおろさなかった。

もともとソ連には、ずっと前から「闇の市場」(ブラック・マーケット)があった。各工場が割り当てられたノルマを達成しようとしても、原材料が足りなかったり、設備が不足していたりする。いっぽう、原材料や設備が余る工場もある。そこで、余った分をよそに回して、足りない原材料や設備を手に入れようとするのは、当然のことだ。これは、国有財産の「横流し」なのだが、ノルマを達成するためには仕方がない。どの工場でも、多かれ少なかれやってきたことである。

でもいったん、「市場」ができあがると、悪質なケースも出てくる。ノルマなんか関係なし、とにかく儲かればいいと、配給された資材をこっそり横流ししてしまう。闇取引にはリベートがつきものだから、これだけで優雅な生活ができる。こういう経済犯罪と、構造的な汚職に、ソ連経済はポロポロに喰い荒らされてきたのだ。

そこへ、市場経済を導入すれば、どうなるか。ブラック・マーケットを公認したのと同じ結果になる。いままで蔭でこそ取引引きしていたものを、生産財の市場で、今度はおおっぴらに商売できる。

生産財の市場は、もちろん、企業が自主的に行動し、経済全体が合理性をとり戻すために必要なものなのだ。が、問題は、いままでの闇取引に慣れた人びとが、資本主義社会の経営者みたくに、企業を合理的に経営しようと思うとは限らないことである。マックス・ウェーバーの研究によると、資本主義は突然始まるのではなく、長い前史を経るものである。禁欲的プロテスタンテイズムの精神を体現した人びとが、営々と身を粉にして働き、血のじむ思いで資本を徐々に蓄積していった。その成果である工場機械設備のひとかけらたりとも、時間の一分一秒たりとも、彼らは無駄にしない。そうやって徹底的に合理性を追求しなければ、競争にうちかつかつことができなくて、企業はたちまち倒産してしまうのである。

ロシア革命以来七〇年。そういう行動様式を、ソ連の経営者も労働者も、身につけるチャンスがまるでなかった。いままで親方日の丸だった国营工場が、突然独立採算になっても、頭のほうがついていかない。ソ連のペレストロイカ、市場経済化が入口で頓挫している理由は、ここにある。

ソ連では長い間、資本が「公共所有」になっていた。「公共のもの」とは、「みんなのもの」といういみである。資本は貴重な財なので、誰か個人が所有してしまうのでなく、みんなで所有しよう、というアイデアである。けれども、みんなが自分のものでないと

思う結果、残念ながら、誰も資本を大切にしくなくなる。それをいいことに、つぎには資本を管理している人間が、いつの間にか自分のものであると錯覚するようになる。だからノルマを達成するために、それを勝手に転売してしまう、というようなことも起こる。

ソ連の工場主（企業の責任者）は、資本家でない。彼は役人にすぎないし、彼の工場の資本は彼の所有物ではない。そこで、独立採算制になったとたん、てっとり早く利益をあげるため、大事な生産設備を切り売りしてしまったりする。利潤があればあがったで、それを貯蓄して生産を拡大したりせず、従業員で山分けする。品質のよい商品を作ること考えないで、材料の手抜きを考える。泥棒に工業の経営を任せているようなものだ。

従業員は従業員で、労働の意欲に欠けている。いまでは就職先が選べなかったかわりに、失業の心配もなかった。少々怠けても、誠にはならない。はっきり言えば、労働者の何割かは、余剰労働力（企業内失業者）なのである。ろくに仕事もしないで給料が貰えるのを、既得権みたいに思っているから、企業主が「さっさと働け、さもないと誠にするぞ」などと命令しても、サボタージュや組合の圧力や、あらゆる手を使って対抗する。労働者が言うことを聞かなければ、いくら企業主ががんばっても、生産性はあがらない。

こんな具合で、ペレストロイカが始まってもう何年もたつのに、経済はいっこうに立ち直らない。相変わらず物不足が続いている。いや、前よりもっと悪くなった。独立採算制の結果、企業の買い溜め、売り惜しみがはびこっているからだ。日本でも、地

価が上がりそうだとすると、企業が先を争って買い占めに走り、巨額の利益をあげた。同じことが、ソ連ではあらゆる財、商品に關して起こっている。基盤が整わないところで市場原理を導入すると、このように思わぬ混乱と不合理が生ずる。

モスクワでは、ウォッカを密造する原料になるというので、数年前から砂糖が姿を消したが、去年からは石鹸も手に入らなくなった。庶民の忍耐も、そろそろ限界に近づいている。目立った成果の上がないペレストロイカに、みんなが失望している。

§ 6 ペレストロイカに、つける薬はあるか

ゴルバチョフをみていると、経済政策はずぶの素人みたくに下手くそである。

市場経済への移行は、たしかに不可欠だ。だが、市場に移行すればすむ、というものではない。ソ連経済を叩き直し、ペレストロイカを軌道にのせるには、よほどの治療が必要だ。

今年七月のヒューストン・サミットでは、苦境のソ連経済をどう支援するかが話題になった。ポンコツ自動車同然のソ連経済を動かすには、膨大な資金援助が必要になる。けれどもいま、ソ連に資金援助をするのは「ドブに金を捨てるようなもの」だという、厳しい指摘が相ついで。貴重な資本を活かすためには、経営のノウハウや、労働者の勤労意欲の向上が欠かせないのだ。

いちばん効き目があるのは、外国企業、合弁企業を大量に進出させることだろう。モスクワのマクドナルドは満員、マニュアル通りのサーヴィスで従業員はニコリ、売上げを伸ばしている。となれば、隣り近所の元国营食堂も、価格やサーヴィスで対抗せ

ざるをえない。同じ理屈で、品質管理、労務管理のしっかりした企業が進出していくには、いくつか条件が必要になる。まず、政情が安定していること。ソ連国内の法律や社会制度が、外国並みに整備されること。電気、輸送手段、原料の供給などが、円滑に行なわれること。質の高い労働力が確保できること。安定した景気の拡大が続くこと。こうした条件が整うなら、ソ連は安定した投資先になる。ゴルバチョフやエリツィンは、まずこうした環境づくりに全力を注ぐことだ。

さらに、資金の回収を早めるために、輸出競争力のある産業がソ連に育ってくれば言うことはない。戦後の日本は、借金だらけだったが、紡績、造船、自動車、家電製品などの産業が牽引車となって外貨を獲得、経済成長に貢献した。宇宙産業でも、医薬品製造でもよい。なにかそうした産業が育つこと。さもないければ、シベリア開発などを通じて、資源を輸出するのでもよい。

いずれにしても、ソ連の社会・経済の仕組みが、自由主義経済と同質のものになっていくことが大切だ。そうすれば、人びとはソ連を安定した投資先として信用する。おのずから、資本はソ連に流れていくであろう。ソ連が完全な市場経済に移行する日こそ、二〇世紀の人類を苦しめた冷戦が本当に終わる日である。

（はしづめ だいさぶろう・社会学士）